

薩長と京都が「なんぼく」を江戸から北に追ったか — 札幌の地下鉄「なんぼく」線を考える —

木下 眞 二*

小田切 正**

サッポロ・オリンピックの直前に完成した、札幌の地下鉄「南北線」も、30周年を迎えた(2001年12月)。その頃は、札幌の人たちは皆、「なんぼく」線と呼んでいた。地下鉄の標識も“Nanpoku Line”であったと思っている。

ところが、二年ほど前、地下鉄大通駅の標識が“Nanboku Line”となっていることに、偶然気付いて、びっくりした。初めは、交通局の間違いと思ったが、こちらの間違いであることが、分かった。何十年も、疑うことなく「なんぼく」と信じ、その間違いに気が付かないことに、二度びっくりしたのである。

私だけの錯覚なのか。そこで、周りの同年輩の札幌出身の人たちに聞いてみる。皆、「なんぼく」である。しかも、私と同様に、何十年も「なんぼく」と信じて疑うことがなかった。

この、まことに不可思議な、札幌の方言「なんぼく線」のことを、同窓会誌などに(資料1, 2), エッセーとして載せたところ、札幌だけでなく北海道、東北地方、関東、関西の、沢山の方々から、意見をいただいた。とくに、俳人の嵩文彦氏、国文学の工藤芳雄氏、英文学の久末弘氏、ケセン語研究者の山浦玄嗣氏、文筆家の遠間昌平氏からは、貴重な資料

が寄せられた。ここに、これらの資料の一部と、私たちのその後の調査を記録しておきたい。この「方言」の不思議な現象の実体が、かなり見えてきたように思う。

しかし、まだ分からないことが沢山あるようである。以下に述べることは、これらの資料をもとに、私たちの考えをまとめたものである。間違っているところは、また、ご指摘いただきたい。(資料の中で、[]の部分は、私たちが後から加えたものである。)

1. どうして「なんぼく」と「なんぼく」の違いに気付かないのか

方言の多くは、言っている人も、方言であることを自覚し、聞いている人も方言であることを認識している。地下鉄南北線のことを、札幌育ちの人は、ある年齢以上では、ほとんどの人が「なんぼく線」と言う。一方、東京や関西の人は、ほとんどの人が「なんぼく線」と言う。ここで、不思議なことは、何年もあるいは何十年も、互いに、そのことを意識していないと言うことである。他の人から、そのことを指摘されて、初めて、その違いに気付く人がほとんどである。

札幌育ちの人にとっても、東京育ちの人に

*北海道浅井学園大学人間福祉学部介護福祉学科

**北海道浅井学園大学人間福祉学部生活福祉学科

とつても、「南北線」という相手の発音を聞くときは、「なん〇くせん」と聞こえ、〇の部分の、ぼ、または、ぼ（あるいは、ぼ、または、ぼの音響の一部）が、「雑音」または「かくし音」となり、そのところ自体は、意味のある音として、知覚されないのではないか。札幌育ちの人は、先入観的に、「なんぼく線」と長い間、信じており、ぼの部分、ぼによって、「おおわれても」、「なんぼく線」と明らかに知覚するのではないか。東京出身の人は、その逆であるが、同様の理由によって、「なんぼく線」と知覚するのではないか。

そこで、聴覚の「だまし絵効果」の専門家、内藤誠一郎博士（NTTコミュニケーション科学基礎研究所・人間情報研究部長）に聞いてみる。（朝日新聞1999年6月10日夕刊科学欄参照）音声の場合、「毎日の暮らしに電話は欠かせません」という文に、0.2秒ごとに空白を入れ、「マイ ノク ニデ ……」のように聞いても意味は不明だが、空白部位に雑音を入れると意味が分かるようになる。前後を補って意味のある言葉を聞き取る機能だ。工場や電車の断続的な雑音の中でも話が聞き取れる理由の一つになっているという。

「なんぼく」「なんぼく」についても、同様の知覚現象によって説明できるのではないか。同じような現象は、日本語、外国語の間にもあり、十分な有意差をもって分析できるそうである。

2. 「なんぼく」の読みは辞典にあるのか

現在の、どの辞典にも、「なんぼく」の読みは無い。従って、現在の正式の日本語の読みとして、認められていない。しかし、昭和

49年発行の、三省堂国語辞典・第二版には（資料3）、なんぼく「南北」のところに、みなみときた。なんぼく。とある。それ以後は、どの辞典にも載っていない。パソコンの漢字変換でも出てこない。

3. 北海道以外にも「なんぼく」はあるのか

私たちの同年輩（50歳以上）では、札幌だけでなく、函館、岩見沢、室蘭、釧路、帯広など、北海道全般に「なんぼく」の発音は広がっているようである。これに対し、東京、関西、九州では、ほとんど例外なく、「なんぼく」である（資料4）。

東北地方も、多くは、「なんぼく」であるが、一部の地区には、今でも「なんぼく」がある。ケセン語大辞典の著者である、岩手県大船渡で医院を開業している山浦玄嗣氏によると（資料5）、「ナンボク」と言う。宮城県、岩手県の日本海側では、今でも、「なんぼく」を聞くことが出来た。仙台では、大部分、「なんぼく」であるが、高齢の人で、「なんぼく」と言っていることが分かった。中年以上の年齢の人では、「なんぼく」と言っているが、よく聞くと、「なんぼく」でも、それほど違和感が無いと言う。

4. 「南北」以外で、「北」を「ぼく」と読むものがあるか

地名では、1つだけある。新潟県の山北町は「さんぼく」である。郵便番号簿にも載っている。神奈川県の上北は「やまきた」である。その他で、正式に、現在の辞典や、パソコンの漢字変換で、出てくるものは無いが、地元の言葉としていくつか聞かれる。いずれ

も、北海道、東北地方の地名に関係するものである。仙台地方では、仙南と仙北とに分けて呼ばれているが、仙北は、皆、「せんぼく」と言う。ただし、岩手県仙北町と秋田県仙北郡は「せんぼく」である。東北地方では、県北は「けんぼく」と言う。関西より西では「けんぼく」である。辞典でも「けんぼく」である。北海道の釧北峠は、地元では「せんぼく」峠と言う(資料6の2)。「地名辞典」には載っていたが、現在のパソコンの地名漢字変換では出てこない。廃線となった「天北線」は、JRで「てんぼく」線であると言っていた(資料7の6)。

北海道、東北以外の地域で、関西の泉北が、広辞苑第四版で「せんぼく」とあるが、第五版では、「せんぼく」と「直っている」。地元の人に聞いてみると、昔から「せんぼく」と呼んでいると言う(資料6の2, 資料8の1)。

地名以外の一般名詞では、「硯北(または研北)」がある(資料6の2, 資料9)。「広辞林」などで「けんぼく」。しかし「大字源」「学研漢和大辞典」でも、パソコンの漢字変換でも「けんぼく」。

5. 札幌の若い人たちは「なんぼく」か「なんぼく」か

以上に述べたように、札幌だけでなく北海道出身の、私たちと同年代(50歳以上)では、ほとんどの人が「なんぼく」に決まっていると信じて疑わなかった。これが「標準語」でないと分かって、それでは、現在の若い人たちは何と言っているのか、調べてみた(資料10)。

札幌と隣接している江別市にある、北海道

女子大学1年生で調査してみた。その結果、(私たちにとって)意外なことが分かった。札幌圏(札幌、江別)出身の学生で、1:2(42人:85人)の割合で、「なんぼく」より「なんぼく」の方が多いことが分かった。それ以外の北海道出身者では、1:4(24人:99人)の割合で、さらに「なんぼく」の方が多かった。東北地方出身者では、23人のうち、1人(青森)以外は、すべて「なんぼく」であった。東京より西の出身者5人も、すべて「なんぼく」であった。

このままで行くと、次の世代には、「なんぼく」が「絶滅」してしまうのではないかと、私たち「なんぼく」派は、強く危惧の念を抱かざるを得ない。

6. 江戸時代は江戸以北すべて「なんぼく」であったのではないか

先に述べたように、昭和49年の三省堂国語辞典を最後に、総ての辞典から「なんぼく」は消されてしまっている。しかし、明治の初めの頃までは、「なんぼく」が東京を含めて東日本、北日本で、「公認」の読みであること的有力な証拠が分かったのである。

明治16年生まれの、諸橋轍二(1883-1982)の「大漢和辞典」全13巻は(資料11の1, 2, 資料12の1)、もっとも権威のある漢和辞典であった。諸橋は、東京高等師範学校や東京文科大学などで、漢文学を講じていた。その「大漢和辞典」に、「南北」に関する言葉が25種、載っている。「南北朝」をふくめ、それらのいずれもが「なんぼく」である。「なんぼく」は1つもないのである。

さらに、歌舞伎脚本作家の、鶴屋南北・五

世は、「孫太郎南北」という人物で、通称「まごなんぼく」「小南北（こなんぼく）」と呼ばれていた（資料12の2）。

7. 薩長と京都が「なんぼく」を江戸から北に追ったか

以上のことを、総合すると、江戸時代までは、関東、東北、（未だ人口は少ないが）北海道は、「なんぼく」であったように考えられる。明治維新になって、薩長、京都をふくめ、関西、九州の人たちが、東京に、指導的地位の人として、入って来、それとともに、「なんぼく」も入って来たように思う。「なんぼく」は、関東から、北に追われ、さらに、東北地方でも、現在は「なんぼく」がほとんどを支配している。北に追われた「なんぼく」は、かろうじて、北海道に残存しているが、若い世代では、「なんぼく」に代わって、「なんぼく」が支配的になりつつある。

8. 「南北」の「連濁」音は本来「なんぼく」であるべきではないか

「北」の単独での音読みは（呉音でも漢音でも）ホクである。「ハ行音」で始まる単語が、撥音（ん）で終わる単語の後に連なって、言葉を作る場合、「ハ行音」は「濁音」か「半濁音」となって「バ行音」または「パ行音」に変わる（資料6の4）。

この場合、「ハ行音」で始まる単語が訓読みのときは、ほとんど(89%)が「バ行音」に変わる。箱（はこ）、袋（ふくろ）、弾き（ひき）、張る（はる）は、暗箱（あんばこ）、寒袋（かんぶくろ）、寒弾き（かんびき）、頑張る（がんばる）となる。

これに対して、「南北」の「北」のように音読みのときは、ほとんど例外なく(96%)、「パ行音」に変わる。南方（なんぼう）、南氷洋（なんびょうよう）、南風（なんふう）の他に、安否（あんび）、音波（おんぱ）、完璧（かんぺき）、元本（がんぼん）、近辺（きんぺん）、官報（かんぼう）、連邦（れんぼう）、鉛筆（えんぴつ）など。

これらのことから、「南北」は、日本語として、本来、「なんぼく」であるべきである（資料7の3）。「なんぼく」は、日本語としては、極めて、例外的な読み方である。なお、撥音（ん）の後の「ハ行音」訓読みの語は、音読みの語に比べて、ごく一部であり(36語：494語)、両者を含めても、撥音の後の「ハ行音」が「バ行音」に変わるのは非常に少なく(530語中54語：10.2%)、「バ行音」に変わるのが大部分である（資料6の5）。

また、わが国には、本来、濁音が無かった（資料6の3、資料12の3、4）。平安朝の中ごろまでは、ヤマト言葉には、「ハ行音」は「パピブペポ」であり、「バビブベボ」は無かった。「パピブペポ」は、その後「ファイフエフォ」に変わり、江戸時代になって「ハヒフヘホ」となったと考えられている。

以上のことから、古くは、「南北」は、すべて「なんぼく」であったと考える。どの時代に、どのような理由で、関西より西の地域に、例外的な読みの「なんぼく」が入って来たかは、興味のあるところである（資料6の6、資料7の1-3）。

9. 「さっぽろ」の美しい方言「なんぼく線」を認知、保存すべきでないか

結論として、「なんぼく」は、本来の日本語の読みとしては、最もふさわしいものと思う。「パ行音」（無声音）は、細かい、美しい、軽快、上品と感じるのに対し、「バ行音」（有声音）は、粗い、汚い、鈍重、下品と感じる、日本人が少なくないように思う（資料7の5）。

この美しい「さっぽろ」の「方言」を保存するために、札幌の地下鉄・南北線は平仮名で「なんぼく線」と標示し、「なんぼく」を日本語の読みの一つとして、再び、辞典に載せることを強く希望する（資料7の4）。

資料1. 木下眞二：札幌の方言・地下鉄「なんぼく線」。北海道大学医学部・同窓会誌・医学部創立80周年記念。268-288, 1999

資料2. 木下眞二：札幌の地下鉄「なんぼく線」。日本医事新報 No. 3950：8（2000年1月8日）

資料3. 三省堂国語辞典・第二版 昭和49年1月1日発行 編者・金田一京助・金田一春彦・柴田武・山田忠雄・見坊豪紀より：
なんぼく [南北] (名) みなみときた。なんぼく。

資料4. 嵩文彦氏（俳人・1938年生まれ）：句集「生井（いくい）」後記より：

各地の方に質問をさせていただいた。南から北へ。鹿児島県，ナンボク。宮崎，ナンボク。ただし，県北はケンボク。竹原，尾道，ナンボク。尾道出身の山本登紀子さんからは「結婚して数十年，夫がナンボクと言っているのを初めて知った。全員道産子の職員に聞いてみると，ナンボク，ナンボク半々でした」とあった。神戸，ナンボク。大阪，ナンボク。彦根，ナンボク。「津軽出身の父に尋ねた所，ナンボクでした」と尾崎与里子さんから。富山については，前任地が同地であった神戸在住の岡部崇明氏から，どちらもナンボクで，札幌出身で富山に住んでいる女性に尋ねても，やはりナンボクと言っているとのことでした。名古屋，多治見，東京，千葉，いずれもナンボク。酒田はナンボクとのこと。大船渡は『淡海』に書いたように，山浦玄嗣氏が調査して下さったナンボク八十三%，ナンボク十七%。

弘前の高校教師の泉谷栄氏からは，自分でナンボクと言っていたが，生徒に訊いてみると全員ナンボクと習ったとのこと。北海道でも若い人にナンボクと言う人が多いようなのも「標準語」教育の影響らしい。木下眞二氏の話では，私たちと同年代（六十-七十）の人でも，親の職業が教員の出の者は札幌でもナンボクと言っているものが多いようである。北見在住の八十歳中葉をお過ぎになっとなおかく鏝たる景川弘道氏からは，自分の周りの者は全員ナンボクとの便りをいただいた。先の山本登紀子さんの職場の人たちは皆若い世代でナンボク，ナンボク半々と言うから，世代間で大きな差があるようだ。

元来，日本語は濁音が主で，半濁音は後世になって出て来たものではなからうか。名古屋

屋の宇佐美孝二氏からは、半濁音は尾張地方ではほとんど耳にしたことはない、との知らせを頂いている。

先の城原君は観世流を嗜むようであるが、謡曲『東北』はトウボクと呼ぶとのこと。古い日本語には、濁音が多かったようだ。東北地方の東北も古くはトウボクだったとのこと。

私なんか、南北朝、南北戦争、鶴屋南北、いずれもナンボクと信じて疑わなかった。木下眞二氏の「南北問題」の提示がなかったら多分一生私はナンボクで通していただろう。

北海道や東北の一部でなぜナンボクが主流となったのか調べればきっと理由があるに違いない。

資料5の1. 山浦玄嗣著：ケセン語大辞典〈下巻〉第二部 語彙編：

nānpogu 実体詞 南北。／共通語では「なんぼく」。nānbogu とも言う。北海道女子大・木下眞二教授のエッセイによると、地下鉄南北線は東京では「なんぼくせん」札幌では「なんぼくせん」と呼ばれている。ほとんどの札幌市民は南北を「ナンボク」と読むという。

釧路出身の工藤芳雄氏によると、釧路でも「ナンボク」であって、どうやらこれは北海道の発音らしいと。ほとんどの国語辞典には「ナンボク」しかないが、『三省堂国語辞典』にだけは「ナンボク」の読みが併記されている。1999年9月、札幌在住の俳人・嵩文彦博士の質問に答えて、わたしが調査した結果では、100人のケセン人（山浦医院の外来患者さんたち）のうち、「ナンボク」と読んだ人は83人、「ナンボク」と呼んだ人は17人に過ぎなかった。

Nānpogu ni massigu ni tōrū kaido a ar' tar.

南北に真っ直ぐに通る街道があった。

資料5の2. 山浦玄嗣氏の嵩氏への手紙(1)：

わたしの妻は山形県東田川郡余目町の出身ですが、彼女もやはり nānpogu といいます。明治41年生まれわたしの母は、ケセンの越喜来村の出身で、これは絶対 nānpogu です。南北などという語は、どこの方言辞典にも載っていません。共通語と同じだから、載せる必要がないと、みんな思っているのでしょうか。東北弁に対する親和性が、札幌の南北を nānpoku にさせているのではないのでしょうか。

資料5の3. 山浦玄嗣氏の嵩氏への手紙(2)：

わたしの印象では私自身を含めてナンボクと読むのが東北地方においても一般的であるように思えます。いずれにしても、このことは大変興味深いことでもあります。恐らく、北海道と東北との間には有意差はないと思われますが、東京はどうでしょうか。まことに興味深いことでもあります。

資料6の1. 工藤芳雄氏（旧制札幌二中の国語の先生）：「南北線の発音をめぐって」：東京の南北線を東京人は「なんぼくせん」と言うのに、札幌地下鉄南北線を札幌人は「なんぼくせん」と言う、という指摘を受けて、私もそのことにはじめて気付いた典型的札幌人の一人である。私は、「南北線」ばかりでなく、まったく気付かずに、何十年か、「東西なんぼく」「なんぼく戦争」「鶴屋なんぼく」と言ってきた。私は釧路生まれの、釧路育ちであるから、これは広く北海道人の発音であるかもしれない。

資料6の2. 「釧北峠」は、地元では「せんぼくとうげ」と言う。小学館の「日本地名大百科」にも、そうなっているから、天下の公認になっているのだろう。「硯北・研北」「ケンポク」、ただし、「大字源」,「学研漢和大辞典」では、「けんぼく」。「泉北」は、「広辞苑」第四版では「せんぼく」であったものが、第五版では、「せんぼく」。誤りの訂正か。時の変化か。

資料6の3. ハ行子音は、文献時代以前は [p] であったが、奈良時代ころには [ϕ] となり、江戸時代には [h] となったと考えられている。しかし、[p] から [ϕ] への移行は全面的ではなく、――

[パピプペポ→ファフィフウフェフォ→ハヒフヘホ?]

資料6の4. そこで、撥音(ん)のあとのハ行音が、どういう場合にバ行音になり、どういう場合にバ行音になるのかを考えようと思って、可能性のあることを、いくつか探してみた。『広辞苑』の「あ」から「かん」の見出し語について調べてみると、[連濁で] 撥音の後のハ行音が、バ行音になっている語は、ほとんど和語である。「暗箱・陰火矢(いんびや)・縁柱・縁端(えんばな)・縁引き・縁蓋(えんぶた)・音引き・棺箱・羹箸・甲走る・頑張る・寒弾き・紙袋(かんぶくろ)・寒鯛(かんぶな)・雁振瓦(がんぶりかわら)・雁風呂という具合である。漢語はわずかに「印判(いんばん)・早魃(かんばつ)」の2語だけである。また、撥音(ん)のあとのハ行音が、バ行音になるのと、パ行音になるのと、どちらが多いかと言えば、圧倒的にパ行音に

なる方が多い。そうして、パ行音になっている語は、ほとんど漢語(型)である。これはほんの一部の調査であるが、全体の傾向を推理することはできると思う。以上のことから言える一般的傾向は、撥音(ん)のあとのハ行音は、和語ではバ行音になり、漢語ではパ行音になるが、そうならない場合の理由は分からない。一般的傾向から言えば、「南北」は「なんぼく」の方が自然な変化と言える。

資料6の5. (つづき)三省堂『新明解国語辞典(第5版)』の全見出し語のうち、「ん」(撥音)に続く初めのハ行音がパ行音あるいはバ行音にかかわるものは、総数532。それらの傾向を見ると、以下の結果であった。

(1) 全体が音読みの場合

a. パ行音にかかわるもの	474語	96%
b. バ行音にかかわるもの	20語	4%
合計	494語	100%

(2) 「ん」に続く後部が訓読み、または全体が訓読みのもの

c. パ行音にかかわるもの	4語	11%
d. バ行音にかかわるもの	34語	89%
合計	38語	100%

この結果を総合すると、(1)a. では圧倒的に(96%)パ行音にかかわるものが多いことが分かる。b. の4%を占めるバ行音にかかわるものを個々にあたってみると、呉音に発音される語や仏教音に関係ありそうな語がほとんどであり、単なる偶然と考えにくい。これらの語は古い時代の発音の伝統が受け継がれているのではないと思われる。

資料6の6.「南北」(なんぼく)も、b.に含まれるもので、四文字熟語の「東西南北」の発音を調べてみると、「西」の読みは、呉音「サイ」漢音「セイ」、 「南」の読みは呉音「ナン」漢音「ダン」であり、全体として「とうざいなんぼく」という読みは、呉音と考えられる。

資料7の1.久末弘氏(札幌二中出身、英語の先生、昭和5年生まれ)の資料6についての解説:「呉音」と呼ばれる発音は、紀元前3世紀以来の弥生時代から、中国江南の地から移り住んだ人々によって、わが国にもたらされたもので、歴史も古く、ヤマトの民衆に慣れ親しまれた発音でした。「漢音」と呼ばれるのは、中国地方の黄河流域を中心とする華北の発音。ヤマト朝廷は7世紀後半以降、隋・唐と交渉を持ち、この頃もたらされたのが「漢音」です。朝廷は中国から入った文字の読みを「漢音」に統一すべく、何度も詔を出していますが、一般民衆にはなかなか受け入れられなかったようです。「漢音」はいわば「官音」ということでしょう。しかし、これらの発音は、現代では、あくまでも日本国内でのみで通用するもので、現代中国語の発音とはまったく異なることは衆知のとおりです。[日本国内で]古来、呉音が用いられて地域はどのあたりと考えると、北部九州、四国の瀬戸内海側、本州では瀬戸内沿岸、奈良、京都、大阪が第1に考えられる。また日本海側も壱岐、対馬、山口-新潟あたりまでは、その影響下にあるだろう。それから外れた地域、具体的には九州南部、東北の福島、山形、岩手、秋田、青森、などが呉音の影響を受けなかった地域として上げられるのでは

なかろうか。

資料7の2.久末弘氏の解説の続:しかし、音読みの語の96%が「ん」のあとで「パ行音」にかかわるということは、絶対多数であり、ぼくが推論した「ヤマト朝廷の漢音(官音)強制の影響を強くこうむった地域、言葉をかえれば、呉音の影響をあまり受けなかった地域に“なんぼく派”の発祥の地はあるだろう」は、そう確率の低い推定ではないと思います。できることなら、インターネットで、全国各地の人々に「東西南北」をどう読むかを問い、「なんぼく派」の地域マップを作ってみたいものですね

資料7の3.久末弘氏から福島清治氏(前・北海道浅井学園大学・国際交流部・部長)への手紙:専門的知識と造詣の深い工藤[芳雄]先生から、数々の資料を送っていただきましたので、続編として、その要約をお伝えします。上古-中古は「北」を“ポク”と発音していた。現代、“ン”(撥音)の後の“ハ行音”が“パ行音”になるのは、日本の上古-中古には“ハ行音”が“パ行音”に発音されていたからです。ですから現代のこの現象は、いわば「昔がえり」と言えましょう。藤堂氏の『学研漢和』によれば、上古、中古の[北の]発音は「puək」です。ですから、わが国に取り入れられたときのときの「北」の発音は、“ポク”だったでしょう。

資料7の4.同手紙続:希望としては、札幌人の「なんぼく線」が東京人の「なんぼく線」を駆逐して半世紀後の国語辞典の項目には「なんぼく」がのり、<古くは「なんぼく」

ともいった>と注釈が付けば万々歳ですね。

資料7の5. 同手紙続：清音“パ”（無声音）と濁音“バ”（有声音）から受ける印象について、小松英雄氏は次のように述べています。

清音：弱い、細かい、美しい、快い、軽い、軽快、上品

濁音：強い、粗い、汚い、不快、重い、鈍重、下品

ですから、札幌人が「自然で耳に心地よく響く“清音”」を選択したことは、標準語の発音の一段上を行くと自負してもいいでしょう。

資料7の6. JRから久末弘氏への手紙：「天北線」（廃線）はJR北海道の社内で『てんぼくせん』と呼んでおります。他の事例も無いものかと探してみましたが、この「天北」のみのようです。

資料8の1. 山野氏（大阪在住）より高文彦氏への手紙：「北」を「ボク」と読むということは小生の今までの世界ではなかったことです。小生が生まれて大きくなり、再び成人となって住んだのは、泉北卿でした。もちろん「せんぼく」です。広辞苑第四版の「せんぼく」は誤りでしょう。もっとも第五版では「せんぼく」と直っています。関西では、まず「なんぼく」は存在しないと思います。

資料8の2. 同手紙続：次に、中国語との関連について：「北」の発音はbèi（ペイ）*ペイではありません。baはバ音にならないような軟らかいパ音、無気音；paはbaの有気

音。日本語で書けばやはりパ。北京はbèijīng（ペイチン）。バビブベボ（濁音）は中国語の発音にはなく、パピプペポになるのかも。

資料8の3. 新妻篤氏（北海道大学名誉教授、元・言語文化部長）談：「北京」のPekingのPと、BeijingのBとは、北京語にとっては、ほとんど同じ発音だと言う。[日本語で表せば、どちらも「ペイ」に近いのかも。]

資料9. 「硯北」：広辞林にて、「けんぼく」。採光のため、人はすずりの北側に南向きにすわる意。手紙の脇付（わきづけ）の一つ。脇付けは、目上の人に書状を送るときに、そのあて名の左下にしるす語。「侍史」「台下」「御中」など。

資料10. 北海道女子大学講義で「南北」の読みについての調査(2000年6月)：

「ナンボク」：「ナンボク」

*短大1年生

札幌出身 18：35

江別出身 6：7

札幌圏（札幌・江別） 24：42

他・道内 11：43

東北 1（青森）：8

他・本州 0：1

韓国 0：1

*学部1年生

札幌出身 16：37

江別出身 2：7

札幌圏（札幌・江別） 18：44

他・道内 13：56

東北 0：14

他・本州 0：4

* 総計

札幌出身 34：71 (32.4%：67.6%)

江別出身 8：14

札幌圏（札幌・江別） 42：85 (33.1%：
66.9%)

他・道内 24：99 (19.5%：80.5%)

東北 1（青森）：22（秋田8，青森5，宮
城4，山形3，岩手2）

他・本州 0：5（名古屋，神戸，岡山，横
浜，愛知）

韓国 0：1

資料11の1. 諸橋轍次の「大漢和辞典」（大修館）より：南北（ナンポク），南北衛〔注：下のキが無い漢字〕（ナンポクガ），南北学（ナンポクガク），南北九宮詩紀（ナンポクキュウキュウシキ），南北曲（ナンポクキョク），南北極（ナンポクキョク），南北軍（ナンポクゲン），南北圏（ナンポクケン），南北郊（ナンポクコウ），南北合腔（ナンポクゴウコウ），南北司（ナンポクシ），南北史合注（ナンポクシゴウチュウ），南北史識小録（ナンポクシシキショウロク），南北史表（ナンポクシシヨウ），南北書派（ナンポクシヨハ），南北人（ナンポクジン），南北選（ナンポクセン），南北宗（ナンポクソウ），南北宅（ナンポクタク），南北朝（ナンポクチヨウ），南北朝体（ナンポクチヨウタイ），南北二玄（ナンポクニゲン），南北派（ナンポクハ），南北洋（ナンポクヨウ）南北利人渠（ナンポクリジンキ

ヨ）

資料11の2. 諸橋轍次（もろはしてつじ）

（1883-1982）（明治16年-昭和57年）。新潟県の生まれ。東京高等師範学校卒業。中国に留学後，母校教授や図書館長を歴任。1927年（昭和2年）から1960年（昭和35年）にかけて完成した「大漢和辞典」（本巻12巻・索引1巻）は，その生涯をかけた大著。日本における漢和辞典のもっとも大規模なもの。朝日文化賞。1965年，文化勲章。浅井学園図書館，百科事典より。

資料12の1. 遠間昌平氏よりの手紙：諸橋轍次は99歳まで存命。中国哲学者であり，漢学者であり，東京文理科大学，大東文化学院大学などで，漢文学を講じた。（諸橋徹次の弟子の原田種成著「漢文のすすめ」新潮選書）

資料12の2. 同手紙：江戸時代後期の歌舞伎脚本作家の鶴屋南北（三世）は「なんぼく」。しかしその後の五世南北は「孫太郎南北」という人物で通称「まごなんぼく」「小南北（こなんぼく）」と呼ばれた。江戸には「ぼく」の方が親しみのある発音だったのだと思う。

資料12の3. 同手紙：平安期の中ごろまでは，日本語には「ハヒフヘホ」のハ行の発音はありませんでした。「パピプペポ」はありました。従って中国から「漢」や「汗」の「ハン」が入ってきた時，似ている発音の「カン」と呼び変えました。地名の「漢口」（ハンコウ）を「カンコウ」，人名の「成吉思汗」（ジンギスハン）を「ジンギスカン」と呼んだ訳です。「上海」（シャンハイ）の「海」も「カ

イ」です。

資料12の4. 同手紙：それからもう一つ、吾国には本来、濁音はありませんでした。大和ことばは全て清音です。その名残は法律文や賞状に残っています。「ーースヘシ」と書いて読む時に現在では「スベシ」と濁ります。「ハ行」がなくて「パ行」があった事、更に「濁音」がなかった事を思えば「南北」は「ナポク」である方が本来の日本語的です。

資料13. 北海道百名山：ピヤシリ山、ピッシリ山、ニセイカウシュベ山、ニベソツ山、オプタテシケ山、ウペペサンケ山、東ヌプカウシヌプリ、ピパイロ岳、イドンナツプ岳、ペテガリ岳、ピセナイ山、ピリカヌプリ、アポイ岳、ピンネシリ、チセヌプリ、ニセコアンヌプリ：アイヌ語にはバ行音の濁音は無いようだ。

資料14. 1999年8月27日北海道立文学館にて：芥川龍之介の「化物帖」に描かれたのっぺらぼうならぬ「のっぺらぼう」。

The "NANPOKU" Line of the subway in Sapporo

Shinji KINOSHITA Tadashi ODAGIRI

ABSTRACT

In Sapporo, we call the subway line that passes from south to north the "NANPOKU" Line. On the contrary, in Tokyo, they call the subway line that is expressed in the same Chinese characters the "NANBOKU" Line. It is discussed why the names of the two subway lines are pronounced in different ways.

Key words : dialect, subway, nanpoku.